

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月30日現在

機関番号：35410

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520220

研究課題名（和文）江戸後期出雲歌壇を構成する歌人データベースの構築とその研究

研究課題名（英文）Building and its research of the poet database which constitutes the World of Izumo waka Poets of the second half of Edo

研究代表者

山崎 真克（YAMAZAKI MASAKATSU）

比治山大学・現代文化学部・准教授

研究者番号：10342544

研究成果の概要（和文）：江戸後期類題和歌集に付された「作者姓名録」や、島根県立図書館蔵『雲陽人物誌』など、出雲歌壇の実態解明に必要な関連歌書の調査・収集を行い、出雲歌壇を構成する歌人について「姓・別称・身分・所在地・血縁関係・師弟関係」などの人物情報を抽出した。二次的資料により情報を整備し、データベースシステムに実装して、江戸後期出雲歌壇を構成する歌人データベースを構築し、これを用いて出雲歌壇の実態に関する研究を行った。

研究成果の概要（英文）：By investigating and collecting data of relevant literature required for elucidating the World of Izumo waka Poetry, such as " Sakusyaseimeiroku " the Appendix of the title anthology of waka poems of the second half of Edo and " Unyojinbutsushi," possessed by Shimane Prefectural Library, person information including family names, nicknames, positions, locations, blood relationships, master-pupil relationships, etc., was extracted. The information is of poets who constitute the World of Izumo waka Poets. Making use of secondary sources, I put a certain amount of information in order, mounted it in a database system, and built the poet database which constitutes the World of Izumo waka Poetry of the second half of Edo. With the database, I researched on the actual condition of the World of Izumo waka Poets.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、日本文学・近世文学

キーワード：出雲歌壇、データベース、作者姓名録、類題和歌集、出雲松江藩、雲陽人物誌、手銭家、類題八雲集

1. 研究開始当初の背景

『古事記』『日本書紀』に記載された素盞鳴尊の歌「八雲立つ出雲八重垣妻籠みに八重

垣作るその八重垣を」により、『古今和歌集』仮名序に「人の世となりて、素盞鳴尊よりぞ三十文字あまり一文字はよみける」、同真名序に「素盞鳴尊の出雲国に到るに逮びて、は

じめて三十一字の詠あり」と記されるなど、出雲は和歌発祥の地として知られる。ところがこれまでの研究では、記紀に収められた神話時代の伝承や『出雲国風土記』、あるいは明治期の小泉八雲について関心が寄せられることが多く、この地の歌壇において行われた活動の実態はあまり解明されていないのが現状である。

こうしたなかで、原青波（義亥）氏の『出雲歌道史』（風明荘 1940.11）は、出雲の和歌活動を「神代篇」から「現代篇」に到るまで編年的に概述した優れた業績である。その後、小原幹雄氏『島根和歌の旅』（松江 今井書店 1965.6）、小原幹雄・伊沢元美氏『出雲・石見文学風土記』（園山書店 1972.12）、小原幹雄氏『島根の和歌を訪ねて』（松江 今井書店 1998.10）も同様の意図のもとにまとめられた。しかしながら、豊富な資料を駆使した「現代篇」に比べ、それ以前の記述はあくまでも概略を述べるに留まり、貧弱と言わざるを得ない。広汎な歌書の収集が困難などの資料的な制約が大きいものと考えられる。

一方で、近年、文庫調査などに基づいた江戸期の地方歌壇に関する研究が進んでいる。従来、久保田啓一氏などによって、中央歌壇の指導的立場にある鳥丸家・中院家・冷泉家などの歌人が地方歌人に対して行う添削などの活動に注目した研究がなされていた。そして上野洋三氏・井上敏幸氏などの研究により、松代藩真田家・庄内藩酒井家・鹿島藩鍋島家をはじめとした大名家の文事に関する実態が徐々に明らかとなっている。応募者は、山陰地方に現存する資料調査に基づき、出雲松江藩松平家（特に第二代藩主松平綱隆とその側室養法院について）の和歌事蹟について研究を進めてきた（拙稿「河本家稽古古文館蔵『山水水』について—江戸初期松江藩主周辺の和歌事蹟—」『古代中世国文学』第22号 2006.6 他）。

江戸後期の出雲歌壇に関しては、歌書の掘り起こしをふまえた研究が蘆田耕一氏により精力的に進められている。蘆田耕一・蒲生倫子氏『出雲名所歌集—翻刻と解説—』（ワン・ライン 2006.6）、蘆田耕一氏『出雲国の四歌集』（私家版 2007.10）では、出雲大社の神官である富永芳久編の歌集が上げられた。これらの歌集については、中澤伸弘氏『徳川時代後期出雲歌壇と國學』（錦正社 2007.10）にも詳述されている。応募者は、島根大学法文学部山陰研究センターの「山陰地域古典文学資料の公開に関するプロジェクト」に客員研究員として参加し、蘆田耕一氏・原豊二氏とともに『類題八雲集』—翻刻・解説と作者索引—（私家版 2009.1）を上梓した。出雲大社第七十八代国造である千家尊孫編のこの歌集は、三百四十人の作者

がすべて出雲国人と考えられる類題和歌集であり、天保十三年（1842）の刊行は全国的な地方歌壇の盛行の流れの中でも初期に位置する貴重な資料である。

今後も山陰地方に現存する資料調査を通して、こうした歌書の収集・内容分析を継続して行うことにより、江戸後期出雲歌壇の実態を解明することが研究の全体構想である。

2. 研究の目的

出雲歌壇の全体像を把握するためには、個別の資料についての分析とともに、歌壇を構成する歌人たちの人物情報や歌人同士の交流の実態を明らかにすることが不可欠である。本研究は、自在な検索を可能とした、江戸後期出雲歌壇を構成する歌人データベースを構築し、出雲歌壇構成歌人の特徴や交流の実態など、出雲歌壇の実体解明に関する研究に資することを目的とする。

江戸期の出雲歌壇は、宝永期（1704～1710）に明珠庵釣月によって二条派の和歌が、また寛政四年（1729）に本居宣長に入門した千家俊信によって鈴屋派の和歌がもたらされ、大きな広がりを見せた。個別の歌書や歌人に注目したこれまでの研究とは異なり、歌人データベースを構築することで出雲歌壇全体を視野に入れ、歌人の出詠状況や交流の実態を明らかにしようとする点に本研究の特色と意義が存する。

また、本研究で取り上げる島根県立図書館蔵『雲陽人物誌』は、傍線抹消部分を持つ編者の草稿本であり、他伝本にはみられない人物情報を有する。こうした情報をも加えたデータベースによって自在な検索が可能となり、出雲歌壇に関する資料が今後新たに追加された場合や、和歌・連歌・俳諧などの営為ごとに異なる号を持つ人物の場合でも、人物比定が容易となる。

こうしたデータベースの構築とその活用の方法は、全国的に盛行の流れにある地方歌壇の研究を進める上で、今後の指針となすことが可能である。

3. 研究の方法

出雲歌壇の実態解明に必要な関連歌書の調査・収集を行った上で、出雲歌壇を構成する歌人について「姓・別称・身分・所在地・血縁関係・師弟関係」などの人物情報を抽出した。その際には、『類題八雲集』付載「作者索引」を基礎データとし、類題和歌集に付された「作者姓名録」や、出雲国を中心とした文化人に関する島根県立図書館蔵『雲陽人物誌』などによってデータの拡充を行った。

二次的資料により情報を整備し、データを統合するためデータベースシステムに実装

して、江戸後期出雲歌壇を構成する歌人データベースを構築した。これを用いて、出雲歌壇の実態に関する研究を行った。

以下、各項目に分けて詳述する。

(1) 出雲歌壇関連歌書の調査・収集

出雲歌壇の実態解明に必要な関連歌書の調査・収集を行った。対象としたのは、島根県立図書館、島根大学附属図書館桑原文庫、および手銭記念館など島根県内に所蔵される資料に加え、出雲歌壇関連歌書や江戸期の類題和歌集などを多く所蔵する大阪市立大学森文庫（『名家伝記資料集成』編者の森繁夫氏蔵書）、刈谷市中央図書館村上文庫（村上忠順氏蔵書）、国文学研究資料館などの所蔵資料である。

国文学研究資料館等にマイクロフィルムが存する場合は、電子複写したものを取り寄せた。それ以外の場合は、調査先でデジタルカメラ・ノートパソコンを用いて撮影するなどして資料収集を行った。

(2) 出雲歌壇を構成する歌人についての人物情報を抽出

先に上梓した『類題八雲集』掲載の「作者索引」では、出雲大社関係者、松江藩士、出雲国神社関係者などからなる作者の「姓・別称・身分・所在地・血縁関係・師弟関係」についての情報を盛り込んだ。

これを基礎データとしつつ、収集した歌書から出雲歌壇を構成する歌人についての人物情報を抽出し、データの拡充を行った。特に『類題八雲集』以降を中心として、江戸期に刊行された類題和歌集に付された「作者姓名録」の情報は、有効な手がかりとなった。

これらの作業は、MIFESなどのエディタソフト、およびExcelなどの表計算ソフトを用いて行った。

(3) 島根県立図書館蔵『雲陽人物誌』の翻刻

人物情報を歌人データベースに追加するため、島根県立図書館蔵『雲陽人物誌』を翻刻した。文政六年（1823）、比布智神社（現出雲市下古志町）の神職である椎の本花叔（春日盈重）が、出雲国を中心とした文化人に関して記したこの資料には、歌人についての情報も多く含まれる。

また、本研究で取り上げる島根県立図書館本は、傍線抹消部分を持つ編者の草稿本であり、島根大学附属図書館桑原文庫本・大阪市立大学森文庫本にはみられない人物情報を有する。こうした情報をも加えたデータベースによって自在な検索が可能となり、出雲歌壇に関する資料が今後新たに追加された場合や、和歌・連歌・俳諧などの営為ごとに異なる号を持つ人物の場合でも、人物比定が容

易となる。

(4) 二次的資料による情報の整備

前記(2)(3)の作業によって得られた出雲歌壇を構成する歌人についての人物情報を、『国学者傳記集成』『名家伝記資料集成』『近世人名録集成』『国書人名辞典』『増補改訂 漢文学者総覧』などの二次的資料によって確認した。これらの先行研究の成果を活かし、出典等の確認を行うことで、情報の整備を図った。

(5) 抽出したデータを統合するデータベースシステムの選定

(2)の人物情報の抽出作業はMIFESなどのエディタソフト、およびExcelなどの表計算ソフトを用いたが、得られたデータを統合し、公開・改良を視野に入れた形態にするため、データベースシステムを選定した。

使用するデータベースシステムとして採用したのは、国文学研究資料館の中村康夫氏が開発された「散文検索システム」である。これは、データの追加・修正が自在であること、画像データも連動させることができることなどの利点を有するためである。

(6) 江戸後期出雲歌壇を構成する歌人データベースの構築

上記(1)～(4)の作業によって抽出・整備したデータを、(5)の作業によって選定したデータベースシステム「散文検索システム」に実装し、江戸後期出雲歌壇を構成する歌人データベースを構築する。

作者姓名録を手がかりとして類題和歌集などの歌書から抽出した人物情報や、『雲陽人物誌』から得た人物情報を、「散文検索システム」というデータベースシステムに実装するため、データの整理を行った。まず人物情報を「名」「歌番号」「姓」「別称」「身分」「所在地」「血縁関係」「師弟関係」「備考」の項目に再配列し、次にVisual Basic マクロを使用してデータにタグ付けを行い、マスターデータを作成した。これを「散文検索システム」に実装して、「出雲歌壇を構成する歌人データベース」を構築した。

(7) 手銭家所蔵の古典籍にみられる人物情報との照合

上記(6)の成果を利用して、歌壇を構成する歌人たちや歌人同士の交流の実態を明らかにすることを試みた。

島根県出雲市の手銭家所蔵の古典籍にみられる蔵書印・書き入れや、歌集・句集・短冊・一枚摺り等の作者名などから得られた人物情報と照らし、交流の実態の解明を目指した。

4. 研究成果

本研究は、先に上梓した『類題八雲集』付載「作者索引」を基礎データとして、関連歌書の調査・収集を行った上で、江戸後期出雲歌壇を構成する歌人データベースを構築し、歌壇の全体像の把握や、実体解明に資することを目的とする。研究の成果は以下の通りである。

(1) 出雲歌壇関連歌書の調査・収集

出雲歌壇の実態解明に必要な関連歌書の調査・収集を行った。調査対象としたのは、島根県立図書館・島根県立八雲立つ風土記の丘展示学習館・大阪府立中之島図書館・大阪市立大学学術情報総合センター森文庫・刈谷市中央図書館村上文庫・国文学研究資料館に所蔵された資料である。特に、江戸後期の類題和歌集を調査し、附載された作者姓名録の収集を行った。

こうした広範囲にわたる江戸後期の類題和歌集を中心とした資料の調査・収集はこれまで行われていなかったため、今回の成果は貴重なものとなった。

この作業に加え、関連する学術論文・研究書を精査し、文化年間以降、明治初期までを対象範囲とする「江戸後期類題和歌集刊行一覧」、および「江戸後期類題集における出雲歌人の入集状況」を整理した。

(2) 江戸後期出雲歌壇を構成する歌人データベースの構築

上記(1)の作業で「江戸後期類題和歌集刊行一覧」として整理した歌書のうち、47作品について分析し、出雲歌人の入集状況を確認した。その結果、天保四年(1833)『類題鮎玉集 二編』から慶応四年七月(1868.7)『類題千船集 三編』までの34作品から、のべ1406名(重複含む)の出雲歌壇を構成する歌人についての人物情報を抽出することができた。これらの作品の中には、天保十三年(1842)『類題八雲集』、嘉永四年(1851)『出雲國名所歌集 初編』など、出雲歌壇において編纂された7点の歌書も含まれている。

こうして収集した類題和歌集などの歌書から、作者姓名録を手がかりとして、出雲歌壇を構成する歌人について「姓・別称・身分・所在地・血縁関係・師弟関係」などの人物情報を抽出し、さらに二次的資料によるデータの整備を行った。

Visual Basic マクロを使用してこれらのデータにタグ付けを行い「散文検索システム」に実装して、江戸後期出雲歌壇を構成する歌人データベースを構築した。

このデータベースを利用して、人物名や別称、神官や藩士などの身分、出雲国各地の地名などのキーワードによって検索を行い、そ

の結果を出雲歌壇の実態解明の考察へとつなげることを試みた。

その一例として、手銭家(島根県出雲市)所蔵の古典籍にみられる蔵書印・書き入れや、歌集・句集・短冊・一枚摺り等の作者名などから得られた人物情報と照らしてみると、一部ではあるが重なる例を見出すことができた。データの拡充をさらに図ることで、出雲歌壇における交流の実態の解明を目指したい。

(3) 島根県立図書館蔵『雲陽人物誌』の翻刻および研究

人物情報をデータベースに加えるため、島根県立図書館蔵『雲陽人物誌』を翻刻した。文政六年(1823)に比布智神社(現出雲市下古志町)の神職である椎の本花叔(春日盈重)が、出雲国を中心とした文化人に関して記したこの資料には、歌人についての情報も多く含まれるため、翻刻作業を基に人物情報の抽出を行った。

また、資料の位置付けを図るため、花叔の営為がいかなる意識のもとに行われたのかを明らかにすることを目的として、当該書の書誌や採録方針に関して考察した。

『雲陽人物誌』は、現在のところ三本の所在が確認されている。このうち島根県立図書館蔵本(乾坤、写本二冊)は、比布智神社から寄託された資料の一つで、少なくとも二段階の加筆・修正がみられる花叔の自筆草稿本である。これ以外の島根大学附属図書館桑原文庫蔵本・大阪市立大学森文庫蔵本の二本は、自筆本を写した佐太神社先代宮司朝山皓氏蔵本(未見)を昭和年間に転写したものである。

島根県立図書館蔵本の書入と三本の本文異同を検討すると、島根県立図書館蔵本での加筆・修正が、桑原文庫蔵本・森文庫蔵本において反映されている例がほとんどである。但し、書入にはやや薄い筆と濃い筆の二種類が存し、少なくとも二段階の加筆・修正が行われたと考えられる。また一部では加筆・修正が反映されない例もある。さらに、島根県立図書館蔵本にはみられない本文が桑原文庫蔵本・森文庫蔵本に存する場合もあるため、三本の関係を判断するには慎重にならざるを得ない。

島根県立図書館蔵本には、抹消された人物をも含めると、二六一名の人物情報が採録されている(一名重複あり)。桑原文庫蔵本・森文庫蔵本では、抹消された人物以外にも、誤脱によると思しき脱落がみられる場合もある。但し、島根県立図書館蔵本にはみられない六名が採録されている。

書名の「雲陽」は出雲国を指す。「～の人」「～の産」として国内の郡名などを具体的に挙げて記される場合が多い。次に示すように

所在地・出身地のいずれかが出雲国である人物が採録されており、他国出身者も含まれる。

- ・出雲国出身で出雲国に在住し活躍した人物
- ・出雲国出身で他の地で活躍した人物
- ・他国出身で、出雲国に在住し活躍した人物

どのような分野で功績のあった人物を採録するかは、採録範囲を定める上で方針の根幹をなすものである。「～を能す」「～に名あり」「～を好む」などの文言を用いて示した各分野の用例数を掲げると、次のようになる。

- ・和歌…68例
- ・囲碁…18例
- ・奇石…1例
- ・連歌…2例
- ・将棋…2例
- ・天文…2例
- ・俳諧…24例
- ・医術…3例
- ・算術…1例
- ・風雅…9例
- ・儒学…20例
- ・双六…1例
- ・狂歌…4例
- ・経学…14例
- ・舞踊…1例
- ・漢詩…31例
- ・軍学…3例
- ・謡曲…3例
- ・書画…7例
- ・学者…13例
- ・射藝…2例
- ・書…83例
- ・道德…8例
- ・立花…2例
- ・画…29例
- ・印刻…1例
- ・茶事…15例
- ・奇工…2例

和歌・俳諧・漢詩に加えて、書や画の分野にも多く例がみられる。また、茶事・囲碁および儒学のほか、実学的な分野にも幅広く例がみられるのは注目される。

乾（全34丁）、坤（全22丁）それぞれの末尾近くでは、丁の途中が空白となる部分がある。乾32丁裏の空白部分の後には、33丁表から乾末尾まで「紀重」「易重」「庸重」という春日家三代の人物が続く。また坤11丁裏の空白部分の後には、12丁表から17丁裏まで「花叔」の自伝的部分が続き、さらに空白をおいて18丁表から坤末尾まで「國守治郷君」以降の松平家や、出雲大社国造の千家家・北嶋家、日御碕検校などの人物が記される。それぞれの巻の末尾近くにあることから、ひとまず執筆を終えた後、花叔自身を含めた春日家の人物や、貴人についての情報を余白となっていた部分に追補したものではないかと考えられる。

(4) 今後の展望

データをさらに充実したものへとするため、出雲歌壇関連歌書の調査・収集は今後も継続して行う。特に、出雲以外で編纂されたものを含め、近世後期のみならず明治期に入ってから編纂され続けた類題和歌集の調査・収集をさらに進める予定である。極めて大量の人物データを扱うことになるため、時間的に膨大な作業が予想されるが、こうした調査の結果を反映して、データベースの更新を継続的に行う必要がある。

構築したデータベースの公開に当たっては、引き続き資料の所蔵元との調整を図らねばならないが、幅広い利用を目指す一環として、調査先でも活用できるよう、タブレット端末によるクラウド利用環境の整備をさらに進めていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 山崎真克、椎の本花叔編『雲陽人物誌』について—諸本の書誌と採録方針を中心に—、日本語文化研究、査読無、第12号、2013 予定
- ② 山崎真克、江戸後期類題集における出雲歌人の入集状況—出雲歌壇人物データベースの構築に向けて—、古代中世国文学、査読無、第26号、2013 予定

[学会発表] (計3件)

- ① 山崎真克、江戸後期出雲歌壇を構成する歌人データベースの構築とその活用について、国文学研究資料館基幹研究「近世における蔵書形成と文芸享受」2012年度第2回研究会、2012年12月23日、国文学研究資料館（東京都立川市）
- ② 山崎真克、近世後期類題集における出雲歌人の入集状況—出雲歌壇人物データベースの構築とその研究—、手銭家蔵書共同研究会、2012年3月14日、手銭家（島根県出雲市）
- ③ 山崎真克、椎の本花叔編『雲陽人物誌』について—採録方針と自伝的部分の意義—、第24回 古典研究会、2011年3月28日、愛媛大学（愛媛県松山市）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山崎 真克 (YAMAZAKI MASAKATSU)
比治山大学・現代文化学部・准教授
研究者番号：10342544

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし